ワード集中講座◆段落設定とルビ◆

猫(ねこ)の事務所

……ある小さな官衙(くわんが)に関する幻想……

宮沢賢治

軽便鉄道の停車場のちかくに、猫の第六事務所がありました。ここは主に、猫の歴史と地理をしらべるところでした。書記はみな、短い黒の繻子(しゅす)の服を着て、それに大へんみんなに尊敬されましたから、何かの都合で書記をやめるものがあると、そこらの若い猫は、どれもどれも、みんなそのあとへ入りたがつてばたばたしました。けれども、この事務所の書記の数はいつもただ四人ときまつてゐましたから、その沢山の中で一番字がうまく詩の読めるものが、一人やつとえらばれるだけでした。事務長は大きな黒猫で、少しもうろくしてはゐましたが、眼などは中に銅線が幾重も張つてあるかのやうに、じつに立派にできてゐました。（インデント：左３文字、右３文字、行間隔：固定値 16 ポイント）

さてその部下の

一番書記は白猫でした、

二番書記は虎猫(とらねこ)でした、

三番書記は三毛猫でした、

四番書記は竈猫(かまねこ)でした。（インデント：左 10 文字、行間隔：固定値 24 ポイント）

竈猫といふのは、これは生れ付きではありません。生れ付きは何猫でもいいのですが、夜かまどの中にはひつてねむる癖があるために、いつでもからだが煤(すす)できたなく、殊に鼻と耳にはまつくろにすみがついて、何だか狸(たぬき)のやうな猫のことを云(い)ふのです。ですからかま猫はほかの猫には嫌はれます。

けれどもこの事務所では、何せ事務長が黒猫なもんですから、このかま猫も、あたり前ならいくら勉強ができても、とても書記なんかになれない筈(はず)のを、四十人の中からえらびだされたのです。大きな事務所のまん中に、事務長の黒猫が、まつ赤な羅紗(らしゃ)をかけた卓(てーぶる)を控へてどつかり腰かけ、その右側に一番の白猫と三番の三毛猫、左側に二番の虎猫と四番のかま猫が、めいめい小さなテーブルを前にして、きちんと椅子(いす)にかけてゐました。（行間隔：固定値 18 ポイント、クリップ：オンラインクリップ(Cat, Animal, Clipart, Colorful)

ところで猫に、地理だの歴史だの何になるかと云ひますと、
まあこんな風です。
事務所の扉(と)をこつこつ叩(たた)くものがあります。
「はひれつ。」事務長の黒猫が、ポケツトに手を入れてふんぞりかへつてどなりました。
四人の書記は下を向いていそがしさうに帳面をしらべてゐます。

ぜいたく猫がはひつて来ました。
「何の用だ。」事務長が云ひます。
「わしは氷河鼠(ひょうがねずみ)を食ひにべーリング地方へ行きたいのだが、どこらがいちばんいいだらう。」
「うん、一番書記、氷河鼠の産地を云へ。」
一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答へました。（行間隔：固定値 16 ポイント、2 段組、行頭の「の位置調整）

一番書記は、青い表紙の大きな帳面をひらいて答へました。
「ウステラゴメナ、ノバスカイヤ、フサ河流域であります。」　事務長はぜいたく猫に云ひました。

ページ設定（余白⇒上下左右の余白はすべて 20 ﾐﾘ、本文の文字は MS 明朝 10.5 ポイント、英文字は Arial を使用）